

ロンドン郊外の広い敷地の奥に、ロイロット家の屋敷は、ぽつんと建っていた。灰色の石造りで、非常に古い建物だ。いたるところに苔が生え、壁面を蔓草が覆っている。下手をすると、廃墟と思われかねない有様だった。

ただ、単に古びた屋敷かと思えば、母屋に併設するように、背の高い鉄塔が建っている。鉄骨を組んで出来た鉄塔で、無数の電線が伸び、屋敷の屋根や壁に繋がっていた。なんとも奇怪な光景である。

「なんだか気味が悪いな」

そうつぶやいたコナンに対し、

「素晴らしい。これは期待できそうだ」

アーサーはやけに機嫌の良い口振りで言った。なんと言うか、浮き浮きしているようにすら見える。

「あのな、アーサー？ お前、本当にわかっているのか？ マリーが取材した話を聞く限りじゃ、今回の件は自殺である線が濃厚だ。依頼人が望むような結果は、多分得られないんだぞ？ 第一、いま俺たちは、こんな事件に関わってる場合じゃないだろ？ あのモリアーティって奴は、放っておいていいのか？ 《ジャック・ザ・ナイトメア》だって、いつ次の犯行を起こすかわかったもんじゃないってのに」

我慢できずに苦言を呈したが、アーサーは涼しい顔だ。

「まあ、彼らには『関与らない』よう警告されたことだしな」

と、平然とした顔で言った。コナンは、まったく、と諦観のため息を吐くしかなかった。

ロイロット家を訪れたのは、コナンとアーサー、それにマリーの三人だ。マリーが同行しているのは、自身の興味や「名探偵」の取材という以外にも、ヘレンをベーカー街に連れて来た責任を感じているかららしい。

「ほんと言うと、彼女をアーサー君に紹介していいかどうか、ちょっと迷ったんだよね。陰惨な事件だし、彼女自身、なんだか事情がありそうだしさ」

マリーの所感には、コナンも同意するところがあった。

そもそも、自殺したのはヘレンの夫が雇っていた助手なのだ。なのに、助手を失った夫ではなく、その妻の方がスコットランド・ヤードの判断に異を唱え、わざわざ探偵の元に――しかも思い詰めた様子で――真相説明を依頼しに訪れているのである。

コナンは「そちら」方面にはまるで明るくないが、これはかなりの高確率で、男女の「あれ」

が関係しているのではないだろうか。いや、とんだ邪推かも知れないが、客観的に見て「怪しい」のは間違いないだろう。愛憎渦巻く陰気な気配がプンプンしている。はつきり言って、あまり関わりたくない気配だ。

そのくせ、当の探偵はいつになく積極的なのである。

アーサーが依頼を受けると即決したのは、依頼人の夫が、ピッチャード・ロイロットなる人物だったからだ。学者ということだが、一体どんな人物なのか。もちろん、ここに来る前にアーサーに尋ねてはいるのだが、相棒は適当にはぐらかして答えなかった。実に不本意な状況である。

「いやはや、なんともわくわくするぞ。なあ、コナン？」

「バカを言え。これぐらい見事に面倒事の子感しかない依頼も珍しいぐらいだ」

ノコノコと付いて来てしまったが、自分だけでも手を引いた方が良かっただろうか。いまとなつては、遅すぎる悩みだが。

屋敷の側に近付くと、うわんうわんと耳鳴りのような音が響いているのがわかった。なんの音だと出所を探したが、頭上を見上げて気付く。風が鉄塔に当たって、音を立てているのだ。鉄塔の骨組みや電線に風が斬り裂かれ、複雑にうねり、衝突して、耳鳴りじみた音を出しているらしい。屋敷の奇怪な印象が、さらに深くなるようだった。

「ようこそいらつしやいました、ホームズ様。さっそく問題の離れに案内致します」

三人を出迎えたのは、屋敷の主ではなく、依頼主のヘレンだった。彼女は、三人を屋敷の奥へと案内した。

外観同様、屋敷の中は新旧が入り交じっていた。半ば風化した廊下の石壁を真新しい室内灯が照らし、骨董品じみたサイドボードに最新式の蓄音機が飾られている。電報用の電信機まであった。

気のせいか、ベーカー街222Bのリビングを彷彿とする雰囲気だ。無言でヘレンの後に続くアーサーが、実は忙しく方々に視線を向けていることにコナンは気付いていた。

やがて、ヘレンは裏口から庭に出た。

その少し先に、巨大な「箱」が置かれているのが見えた。

「あれが離れの小屋です。パーマーはあそこで寝泊まりしていました」

ヘレンの台詞に、コナンは改めてその箱を見直した。

高さ約八フィート。幅と奥行きは、外から一瞥した限りでは、それぞれ六ヤード前後と言ったところか。正面に出入り口らしきドアがあり、側面には窓のような物もあったが、全体としての印象は変わらなかった。小屋というよりは、巨大な箱だ。それも鉄の箱である。マリーが説明してくれた通りの小屋だった。

「元は実験室だったんでしたね？」

「はい。ただ、主人が実験に使っていたのは私がこちらに来る以前だそうで、私も話に聞いたことがあるだけです。私が嫁いだころは、使用人が住んでおりました。ただ、立て続けに奇妙なことがあつてから、気味悪がつて誰も近付かなくなつていたのです」

「奇妙なことと言うと？」

「色々ですわ。寝泊まりした者が体調を崩したり、身体のあちこちに痛みを感じたり。熱にうなされ、命を落としかけた者もいました。原因はわからずじまいです」

「亡くなった助手の方は、そんなところで寝泊まりしていたんですか？」

「パーマーはそうした話を聞いても、まるで気にしませんでしたから」

小屋の話もいかにも胡乱だが、死んだ助手まで怪しく思えてきた。単に変わり者だったのか、もしくは、この小屋で寝泊まりする「理由」があつたのだろうか。

「いま使用人はどちらで就寝しているのですか？」

「パーマーが来てからは、通いで日中だけ来てもらっています」

「では、事件の夜に屋敷にいたのは、貴方とご主人だけだったのですか？」

「はい」

ヘレンは頷いた。とはいえ、一番近い隣家でも五百ヤードは離れている。外部の人間が気付かれずに入入りするのは簡単だろう。

「……中を見ても？」

アーサーが尋ねた。見れば、一体何がそんなに気になるのか、目を爛々と光らせている。

「もちろんです。鍵は、中に入ったときに壊したままですのぞ」

ヘレンの了承を得て、アーサーはすぐさま小屋のドアを開けた。コナンも渋々相棒の後に続く。

中は、外から見た印象ほど殺風景ではなかった。壁には壁紙が貼られ、簡易な物だが家具もひと通り揃っている。

ただ、窓とは反対側の壁際に置かれたベッドは、焼け崩れ、炭化した残骸だけが残っていた。ベッド周辺は、床から壁、天上までが、黒く煤けている。人が焼け死んだ跡だと思つと、背筋がぞわぞわする気がした。

他方、他の場所は特に焼けた形跡は見られなかった。コナンは焼け跡から目を逸らしたくて窓を確認したが、ひとつだけある窓は、しっかりと施錠されていた。助手が死んだときも、鍵は掛かったままだったらしい。また、外から見た段階でわかつていたが、窓には鉄柵まで取り付けられている。この鉄柵にしろ、焼けた様子もなければ、損傷した箇所もない。

「………ロッキング・ルーム 密室、か」

嫌そうにつぶやくコナンを余所に、アーサーはさっそく室内を検分し始めている。まずは焼けたベッドの側にしゃがみ込み、いつものアイルーペを取り出した。

これはしばらくかかりそうだ。コナンは入り口に立つヘレンに振り向いた。

「当時の状況はミス・ハドソンから聞いていますが、ミセス・ロイロットからもお聞かせ頂けませんか？」

「はい。と言っても、先日お伝えしたことがほとんどです。あの日、パーマーは普段通りこの小屋で就寝していたのですが、深夜に火災が起きて……駆けつけたときには手遅れでした」

「自殺するはずがないとのことでしたが、当日、彼の様子に変わった点はありませんでしたか？」

「特に何も……ああ、珍しく酔っていたようでしたが」

「酒を？ とすると、酔って火の不始末を起こしたということもー」

「あり得ませんわ。彼は煙草を吸いませんでしたし、ここには暖房器具もありません。明かりも電灯です。火の気がないのです」

「彼が持ち込んだということは……」

「なんのためにですか？ 理由がありません」

ヘレンの回答に、コナンは頷くしかなかった。

だが、ヘレンには頷いたものの、すべての状況は助手が自ら火を放ったー自殺したことを示している。さてどうしたものか、とコナンは内心頭を抱える。

しかし、

「火災は深夜とのことですが、最初に気付いたのはどなたですか？」

ベッドを調べ終え、今度はドアをアイルーペで観察していたアーサーが、振り向きもせずヘレンに質問した。

「……私です。でも、気がついたときには、もう……」

「どうして気がついたのですか？」

「……え？」

ヘレンが瞬きをした。

アーサーは鍵の壊れたドアノブに顔を寄せたまま続ける。

「焼けたのは小屋の内側だけだ。煙は出たでしょうが、この部屋の構造では、すぐに外にはもれないはずですよ。もれたとしても、わずかでしよう。深夜なら見落としてもおかしくない。母屋からは少し離れますしね。外から見ただけでは、室内が燃えていると判断するのは難しくなっただけです」

「それは……あの晩はなかなか寝付けず、庭を散策していましたので。よくあるのです。私は寝付きが悪いものですから。それで、小屋の近くを歩いていたとき、窓に揺らめく明かりが見

えたのです。こんな時間に起きていることは珍しいですし、近付いてみましたら、中でベッドが燃え上がっていて……パーマーも……」

「そのときご主人は？ 寝室は同じですよ？」

「主人はいませんでした。いつも遅くまで仕事にかかりきりで、就寝するのは明け方近くというのが常でしたので」

そう答えるヘレンの口振りは、やけに素っ気なかった。コナンは思わず、マリーと視線を交わす。

ロイロット家の夫婦仲は良好とは言いがたい。とすると、これはやはり……。

「火事が起きているのを発見したあとは？」

「小屋に入ろうとしましたが、鍵が掛かっけていてドアが開きませんでした。やむなく主人を呼びに研究室に走って……主人は話を聞いたあと、研究室にあった機械を持ち出し、それでドアの鍵を壊しました」

「小屋に入ったとき、中の様子は？」

「それが、そのときは中には入っていませんの。主人が、危ないから近付くなど。実際、ドアを開けた瞬間、炎がひととき大きく燃え上がって入れなくなりました。それに……その時点でパーマーが事切れているのは明らかでしたので……」

結局、ロイロット夫妻はそのまま朝を待ち、スコットランド・ヤードに電報を打ったらしい。

「ふむ」とアーサーは頷いて、調べていたドアノブから顔を離した。

「ドアを開けた瞬間火勢が強まったのは、外気が入り込み、酸素が補給されたからでしょうね。密閉状態で火を燃やせば、一見鎮火したように見えても、高熱状態を維持していることがある。

ご主人の判断は正しかったように思われます」

アーサーはそう評価したが、実際には火の手はベッドの周辺に留まっている。ピッチャードの言動は、ヘレンを現場に近づけないための方便と取れなくもないだろう。

コナンの懸念を余所に、アーサーはドアから離れると、今度は窓に近付いて顔を寄せた。一度アイルーペを外し、つぶさに観察する。かと思うと踵を返し、早足に小屋を出た。

「あっ、おい、アーサー」

コナンも相棒を追って外に出る。するとアーサーは、鉄柵に塞がれた窓を外側から同じように眺め、さらには這いつくばって窓の下の地面を調べ始めた。

「なんだ、アーサー？ 何か見つけたのか？」

『『見つける』と言うより、『探す』と言う方が近いな』

「探す？ 何を？」

「無論、僕の推理を裏付ける証拠さ」

「推理って……何かわかったのか？」

まさか、本当に自殺ではなく他殺だとも言うのだろうか。コナンは身構えたが、アーサーは意に介することなく、「ふう」と地面から立ち上がる。

手に付いた土を払いながら、コナンをニヤリと一瞥し、

「何かわかったも何も、この実験室をひと目見た瞬間から……いや、マリーの話聞いたときから、僕の中で答えは出ている」

相棒の言い草に、「はあ？」コナンは鳩が豆鉄砲を食ったような顔をした。

「まさか」

「ああ、僕もまさかと思ったよ。けど、どうもそれ以外に考えられない」

「いやいや！ さすがに言い過ぎだろ？ いくらなんでも、そんなわけがない」

「そんなわけがない？ 確かにな。俄に信じがたいのは、僕も同じさ。検証は必須だよ。しかし……すべての状況証拠は、その信じがたい事実を示唆している」

「だから、待て！ じゃあ、何か、アーサー？ お前、もうこの事件の謎を……」

コナンがアーサーに詰め寄ったときだった。

「何者だ」

やや枯れた無機質な……しかし重厚な誰かが、コナンの背後から投げかけられた。

慌てて振り返ると、母屋からゆっくりと近づく、一人の男がいた。

初老の男性だ。五十代か、ひよっとすると六十を過ぎているかもしれない。ただ、その大柄な体躯と堂々とした立ち姿からは、およそ老いを感じさせなかった。

使い古されたフロックコートを作業着か何かのように身につけている。ごわついた灰色の髪やひげも、最低限手を入れているといった様子だ。こちらを見る双眸は恐ろしく狷介で、深い皺の刻まれた顔は、黙っていても相対する者を威圧するかのようだった。

粗野な強面。だが、瞳の奥には極めて理知的な光がのぞいている。

コナンがとっさに身構えた。

一方、

「ドクター・ピッチャード・ロイロット！」

アーサーはコナンが止める間もなく初老の男性に歩み寄った。

「初めまして。僕の名は、アーサー・ホームズ。貴方の論文には、すべて……少なくとも、公に発表された物は、残さず目を通しています。貴方の発想の独創性と先見性には、感嘆の思いしかありません。お目にかかれて光栄です」

およそアーサーとは思えないような友好的且つ社交的な声音と態度だ。しかも、満面に笑み。コナンは目と耳を疑った。見れば、小屋から出たマリーも、あぐりと口を開けている。

ただ、対する男性ーピッチャードの態度は硬かった。

握手を求めて手を差し出すアーサーを無視し、その鋭く重たい眼差しで、ギロリとヘレンをにらみつけた。

とっさにマリーの背後に隠れるヘレンに向かって、

「お前が招き入れたのか？」

「……………」

夫の問いかけに、妻は答えない。ただ、この場合沈黙は肯定と同義だろう。ピッチャードは一瞬だけ、顔をしかめた。

「……馬鹿なことを」

小さくささやき、それから語気を強くする。

「ヘレン。パーマーは自ら命を絶つたのだ。奴には才能がなく、奴はその事実には耐えられなかった。それだけのことだ。市警もそう判断した。結論は出ている」

「……………」

ヘレンがマリーの背後から、黙ってピッチャードをにらむ。間に挟まれたーというか盾代わりにされたーマリーが、眼鏡のレンズの奥で助けを求めるように。パチパチと瞬きを繰り返している。

ピッチャードはじっと妻を見据えたのち、アーサーとコナンに向き直った。

「研究に雑音は無用。何を吹き込まれたのか知らんが、お引き取り願おう」

十分の一インチたりとも妥協の余地のない、厳然たる口調だった。

部外者を嫌うのは、偏屈な学者にはありがちなことだ。大学の教授にも似たような人物はいらる。

ただ、依頼主は目の前の男ではなく、ヘレンだ。コナンは表情を引き締め、反論すべく前に出ようとした。

しかし、そんなコナンを、アーサーが手を上げて制止した。

「畏まりました。僕としても、博士の研究を邪魔するのは本意ではありません。一度引き上げます。ただ、近いうちに、また」

如才なく告げるアーサーを、ピッチャードは無言でにらむ。いや、それはにらんでいるといふより、感情を排して、ただ「見て」いるだけなのだ。まるで解剖をする医者のように。

「アーサーっ」

「いいから」

アーサーはコナンに短く答えると、一礼して男の前から離れる。ヘレンに「また連絡します」と言い残して、小屋の前を去った。

コナンは仕方なく首を振り、アーサーの背中を追った。マリーも、気まずい空気のまま、すぐに二人に続く。

ただ、アーサーは振り返らなかったが、コナンとマリーは最後にもう一度、ピッチャードたちの様子を肩越しに確かめた。

残された夫婦の間には、二人きりになったあとと会話がない。視線すら交わそうとしていない。

「……あのさ？ 自殺かどうかは置いといてもさ？ あのご主人、怪しすぎない？」

母屋に入って早々に、マリーが小声で意見を求めた。コナンは心から同意して頷いた。

「アーサー。このまま戻っていいのか？」

来た道を引き返すアーサーに、コナンは背後から話しかける。

アーサーは足を止めないまま、

「屋敷内、特に博士の部屋を調べたいところだが、あの様子では許可は下りない。なら、見るべきものは見たよ。それより検証だ。実験の必要がある」

「実験？ なんの？」

「密室殺人のさ」

「……それ、まさか222Bでやるんじゃないだろうな？」

「あ、けど、遺体の状態は知りたいな。と言っても、すでに埋葬済みか。資料だけでも……」

「222Bでやるんじゃないだろうなっ！？」

返答はない。やはりルームシェアの解消は要検討事項だ。それも、想定以上に早く。

コナンたち三人は、足早にロイロットの屋敷を後にする。

最後に振り返った屋敷からは、まだ鉄塔の立てる風音が、うわんうわんと鳴り続けていた。

*

「あつたあつた、これだ。パーマー・アーミテージ。ほらよ。お探しの記録だけ」

クラウド・レストレードが机に投げ出した紙の束を、コナンは礼を言って手に取った。

ロイロットの屋敷から戻ったコナンは、その足で単身スコットランド・ヤードを訪れていた。

アーサーの使いだ。目的は、死んだパーマー・アーミテージの調査記録を照会すること。アーサーはと言えば、一刻も早く確かめたいというので、先にベーカー街に戻っている。「密室殺人の実験」を行うつもりらしいが、下手に手伝いを要求されるぐらいならと、コナン自ら使いを買って出たのだった。

「しかしまた、妙なことに首を突っ込んだな。俺は担当じゃないが、その件は自殺ってことで片付いてたろ？」

「俺も自殺の線が濃厚だと思うんですが、アーサーは違うみたいで」

「そうかい。よくわからねえが、俺のヤマじゃなくて良かったよ」

心の底から他人事の口振りで言っつて、クラウスはケラケラ笑う。一瞬イラツとしたが、立場が逆ならコナンも同じ感想を抱いたはずだ。

「……そう言えば、例の自動機巧人形に関して、不吉な噂を耳にしましたよ？」

「あ、銀助か？ お前さん、どう思う？ やっぱ壊しといた方がいいかな？」

「それ以前に、市警が押収した証拠品を、事件が終わったからって、第三者の民間人に渡さないで下さいよ」

「第三者も何も、もろ当事者だろ、お前さんたち」

「人捜しを頼まれただけの民間人ですつ。どうせまたアーサーに、何か弱味を握られてるんでしょう？ 仮にもロンドン警視庁の警部たる者、もう少し毅然としてくれませんか？」

「そう思うんらお前さんの方で、もう少し相棒の手綱を取っといってくれ」

クラウスは仏頂面でぼやきながら、テーブルのスキットルに手を伸ばし、グビリと呷った。そのグビリが弱音のひとつなのは間違いないと思うのだが、もはやコナンはそれ以上何も言わなかった。

渡された記録に、素早く目を通す。

とはいえ、焼死自体は珍しくとも、自殺は自殺だ。大した分量の記録でもない。

「……当たり前ですが、不審な点は特にありませんね」

「本当に自殺ならな」

「ん？ この『ネックレス、ブローチ』というの？ 最後に疑問符が付いてますが？」

「どれだ？ ーああ、この記述か。確か、遺体の上によくわからん金属の残骸が乗っかってんだ。被害者は当日酒に酔ってたみたいで、外出着のまま靴も脱がずに死んだことがわかってる。だもんで、その残骸も、何かの装飾品の類だろうってことになったのさ」

「ま、待って下さいっ。それって、自動発火装置か何かだったんじゃない？」

「生憎、大きさはソーサーぐらいあったが、薄っぺらい金属板の加工品だ。『装置』なんて大層なものじゃなかったはずだぜ？ ええと、誰かがスケッチを取ってたはずだが……」

クラウスが横から手を伸ばし、ペラペラと紙を捲っていく。すると、最後のページに、その残骸の形が鉛筆で描かれていた。

中々に精緻なスケッチだ。とはいえ、焼け跡から出て来た物だし、元の細工もかなり細かったのだろう。なるほど「おそらく装飾品の類」としか表現しようがない物だった。

「……他の部品は可燃性の材質だったとすれば……?」

「あのな。いくら酔ってたって、発火装置を抱きかかえて寝る馬鹿はいねえだろ。いたとすれば、それこそ自殺の証拠だ。それに、被害者が度々その手の装飾品を付けてたことは、使用人の証言から裏が取れてたはずだ」

言われて再び記録を読み込むと、確かに、クラウスが言った通りの証言が記されていた。コナンは小さく唸り、次いでため息をこぼした。

やはり、外から室内に火を付ける方法がなければ、自殺以外には考えられないようだ。アーサーには一体、何が見えているのだろうか。コナンは手の中の記録をにらみつけたあと、諦めて腰を上げた。

「ありがとうございます、警部。この記録はー」

「ああ、構わねえから、持ってきな。紛失したところで、誰も気に止めやしねえからよ」

「助かります」

そう言っつて、コナンは記録を手に、クラウスに背を向ける。

しかし、

「それからーこいつだ。お前さんに頼まれてた方の資料」

ギクリと全身を震わせ、コナンは足を止めて振り向いた。

クラウスがじとつとコナンを見つめながら、もうひとつの紙の束を差し出す。コナンは無言で戻り、クラウスから資料を受け取った。

「いまさらそんなもの、どうするつもりだ?」

「……改めて向き合いたかったので」

「このこと、アーサーは知ってたのか?」

「……個人的なことですから。警部も、内密にお願いします」

神妙な面持ちでコナンが答える。クラウスはねめつけるようにコナンを見つめ、椅子の上で居住まいを正した。

「……コナン。何かあるなら、相談に乗るぜ?」

「……ありがとうございます。大丈夫です」

コナンは深く頭を下げると、今度こそクラウスの前から立ち去った。

クラウスはコナンの背中を見送ったあと、スキットルに手を伸ばし、グビリと呷った。

*